

# 2019

# 国語

## 〔帰国生入試〕

### 注 意

1. 試験時間は、8:50~9:40の**50分**です。
2. 問題は ・ の2つです。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

□ 次のカタカナに句読点をほどこし、漢字ひらがな交じりの文章に書きかえなさい。(漢字で書けるものはすべて漢字で書きなさい。)

シゼンサイガイハオソロシイツドコデハツセイスルカワカラナイヒゴロカラヒジヨウジタイニソナエテ  
オクヒツヨウガアルキケンカラミヲマモルタメニヒナンバシヨノカクニンヤアンピカクニンノシカタヲガ  
ツコウダケデナクカゾクデモハナシアツテオクトヨイ

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

うす紅や真紅のバラが咲き、緑陰に涼やかな風が吹く公園のあちらこちらに、多くの家族連れが、携帯コンロまで持ち込んで、お茶を飲み、お菓子や、手作りのお弁当料理を楽しんでいる。

子どもたちとその親、祖父母や親戚とおぼしき人たちが、のんびりと芝生に寝転び、あるいは談笑している。……これ、どこの国の光景だと思われませんか？ ①実は、イランなのです。

イランを旅したとき、休日や夕暮れどきなどによく見かけた光景で、その人々の穏やかな、のんびりと寛いでいた感じが、いまでも鮮やかに目に浮かびます。

女性は髪を隠し、肌の露出をせず、なるべく身体のラインがあらわにならない服を着る。そういう規範を、自国に訪れる外国人にも課す国ですから、私たちは飛行機の中にいる間にスカーフを巻き、髪を隠して入国しました。

外国人にまで窮屈な規則を押し付けてくる国だから、さぞや国の中は 1 しているのではないか、女性たちは男たちの後ろに隠れ、他者との接触を避けているのではないか、などと思っていたのですが、実際にイランの中を旅するうちに、②その先入観は、つぎつぎにひっくりかえされていきました。

公衆トイレに a 並ぶやいなや、全身を黒いチャードルで包んだイラン女性たちが、「あら！ 韓国人？」と英語で話しかけてきたので、「いえ、日本人です」と答えると、「わ！ ほんと？ 私、『おしん』大好きなのよ。あれは傑作よね。日本でも評判がいい番組だっというけど、

ほんと？」とか、「イランの印象どう？」など、明るい表情で、

2

会話を進めていくのです。

男性がいない場所だから？ と思つたら、そんなこともなくて、カップルで歩いている若者たちなども、実に**気軽に**話しかけてきます。

ある宿に泊まったときのこと。お昼までは少し間がある頃に、部屋の外から、楽しい声が響いてくるので、何事だろう、と戸を開けると、学校行事で訪れたらしい、十二、三歳ほどの少女たちが、澄んだ水が流れる水路沿いの芝生の上に座って、お茶を飲み、お菓子をつまんで、おしゃべりをしていました。

母と私に気づくや、少女たちは、ぱつと立ち上がり、

3

笑いながら駆け寄ってきて、私たちを囲み、「どこからいらしたのですか？」

「日本人？ 私、日本人に会うのは初めてです」などと、盛んに話しかけてきました。

みな、驚くほど礼儀正しいけれど、はちきれそうな好奇心で

4

した目をして、頬を上気させ、お茶やお菓子を、どうぞ、どうぞ、と勧めてきます。

「日本では、漢字で名前を書くそうですね。漢字って、どんな風に書くのか、見せていただけませんか？」と頼む子もいれば、ためらいがちに手を差し伸べて、「あちらに、花がとても綺麗なお庭があるんです。座っておしゃべりしませんか？」と誘ってくれる子もいます。

つややかな頬をした少女たちにねだられて、母は、少女たちの名前を聞いては、彼女たちが差しだす可愛いノートに漢字で名前を書いてあげていました。

世界の様々な土地を旅しましたが、これほど率直に、しかし礼儀正しく、どんどん話しかけてくる少女たちに会ったことはありませんでした。

彼女たちは女子中学生で、先生は女性だけ、とのこと。男子は男子中学に通い、先生は男性。そういう性別による明らかな分離はありませんし、ツアーバスでも、運転手は一定の距離を走るとバスを停めて、走行記録を提出せねばならず、経済制裁による物資調達の難しさから、道路沿いには、延々と、車やバイクの修理店が並ぶような、不自由な面も見え隠れします。

それでも、少なくとも「観光客」である私が受けたイランの印象は、びっくりするほど明るく朗らかで、清浄でした。

乾ききったザグロス山脈の麓の地面には点々と穴が開いており、覗き込むと、チャプチャプと音をたてて流れる水が見えます。これが「カーナート（地下水路）」で、乾燥した地面の底には、豊かな水が流れているのです。

赤茶けた岩山の麓の道を走るうちに、遠く、幻のように緑が見えたかと思うと、いきなり、壮麗なオアシス都市が現れます。かつて「世界の半分」と称えられた、ササーン朝ペルシャ時代からの古都イスファハーン。

ザーヤンデ・ルード（命を与える河）に沿って築かれたこの古都は、したたるような緑と花に囲まれた、整然と美しい都で、いまもなお、往時の繁栄の跡を遠く響かせています。

ここでも、夕暮れ時には、水の香りのする涼風に誘われたように、庭園に集まって、のんびりと過ごす家族連れの姿が見られました。イタリアやギリシャでは、老いた母を連れていると格好のカモに見えるのか、よく拘りに狙われ、哀しく腹立たしい思いをしましたが、イスファハーンでは、母とふたりで歩いていても、キケンを感じることもなく、ちよつと道に迷ったかな、という顔をしたとたん、道の両脇に並んでいる店から、おじさん、おばさんが、「大丈夫？ 道にでも迷ったかい？」と、声をかけてきてくれます。

どんなに平和に見えても、異国では油断は禁物。そう思いながらも、つい、気が緩んでしまうのは、道行く人たちの表情が穏やかだったからなのでしょう。

砂漠の中に、突如現れる、壮大なペルセポリスの遺跡の、息を飲むような見事さ、詩人の廟に咲き乱れるバラの美しさ、女性たちの積極性、街で物乞いを見かけないこと……様々な「意外さ」が、心の中に降り積もり、私は、ガイドをしてくださった中年男性に、そんな感想を打ち明けました。

すると、彼は、苦笑をしながら、こういう話をしてくれたのです。

「以前にも、日本人観光客を案内して、イランの国内あちらこちらを巡ったんですよ。二週間ぐらいだったかな。

そのとき、イラン・イラク戦争の生々しい傷跡が残る建物などもお見せしてね、様々、イランという国について説明したんです。みんな、良い方ばかりでね、楽しい旅だった。

でも、最後の最後、全旅程が終わって、これでお別れ、というとき、ある日本人男性が、ぼくの肩を叩きながら、こう言ったんですよ。

——『フセインさんに、よろしくな』って……。

二週間ですよ。二週間。ぼくは、一生懸命説明した。イラン人はペルシャ民族で、イラク人はアラブ民族。イランとイラクはまったく違う国で、血みどろの戦争をした、と。それなのに、彼の頭の中では、相変わらずイランとイラクは、ま、おんなじような国……だったのかと思うと、哀しかったですよ」

③ 赤面してしまいました。私もまた、似たような感覚で、ずっと生きてきましたから。

炎暑えんじょの砂漠の底を滔々とうとうと水が流れているように、あるいは、乾ききった岩山の陰かげから、いきなり緑したたるオアシス都市が現れるように、初めて見たイランは相反する光景が共存する国でした。

そのことに驚きつづけたのは、私の心の中に、この国に訪れる前に、確固としたこの国のイメージが作られていたからなのでしょう。

観光で目にする事など、ごくごく限られたことに過ぎません。それでもなお、④イランで感じたあの驚きを、覚えておきたいな、と思いました。

私はきつと、いつも、世界の半分を知らないまま生きている。そのことを、忘れないために。

(上橋菜穂子『明日は、いずこの空の下』による)

(注1) チャードル：イランの女性が外出して公衆の面前に出る際、伝統的に身につけてきた衣装であり、体全体を覆う黒系の布の形をしている。

(注2) 往時：昔

(注3) 格好のカモ：自分にとって都合のいい相手

(注4) 廟：王者・偉人などの霊を祭った所

(注5) 物乞い：こじき

問一 波線部 a～c の本文中での言葉の意味としてもっとも適当なものを選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- |   |             |             |
|---|-------------|-------------|
| a | 並ぶやいなや      | ア 何気なく並ぶと   |
|   |             | イ 並んだあとに    |
|   | ウ いやいや並ぶと   | エ 並ぶとすぐに    |
|   | オ ゆっくり並ぶと   |             |
| b | 気さくに        | ア 打ち解けた様子で  |
|   |             | イ 緊張した様子で   |
|   | ウ へりくだった様子で | エ 物珍しそうな様子で |
|   | オ ばかにした様子で  |             |

c 息を飲む

- ア あまりの恐怖で息ができなくなる  
イ はっと驚いて思わず息を止める  
ウ 感動のあまりため息をつく  
エ 落ち着くために大きく息を吸う  
オ 息ができないくらい苦しくなる

問二 空欄 1～4 の中に入る語を次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

- ア ごくごく      イ きらきら      ウ にこにこ      エ どんどん      オ ピリピリ      カ クラクラ

問三 傍線部①「実は、イランなのです」とありますが、筆者はイランという国に暮らす人と場所にどのような思い込みを持っていましたか。それぞれ書きなさい。

問四 傍線部②「その先入観は、つぎつぎにひっくりかえされていきました」とありますが、どのような体験によって「ひっくりかえされた」のですか、その答えに当てはまらないものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 公園で家族連れが手作りのお弁当料理を楽しんでいたこと。

イ 公衆トイレで並んでいると女性たちが英語で明るく話しかけてきたこと。

ウ 女子中学生から学校の先生はすべて女性だと聞いたこと。

エ 道行く人たちが親切で表情が穏やかだったこと。

オ 日本でも評判のいい番組を知っていたこと。

問五 傍線部③「赤面してしまいました。私もまた、似たような感覚で、ずっと生きてきましたから」という言葉について、次の設問に答えなさい。

(1) 「私」はどのようなことを聞いて、「赤面」したのですか、答えなさい。

(2) なぜ「私」は赤面したのですか。その理由を六十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部④「イランで感じたあの驚きを、覚えておきたいな」とありますが、そう思った理由を説明したものとしてもっとも適当なものの中から選んで、記号で答えなさい。

ア イランとイラクの違いを教えられても理解できずに同じ国だと考えていた日本人を恥ずかしく感じたから。

イ かつて世界の半分と称えられた古都イスファハーンが昔と変わらぬ美しさであったことに感動を覚えたから。

ウ イランの人々の生活が想像したものあまりにもかけ離れていたことに強い衝撃を受けたから。

エ 広い世界を知らずに、先入観に囚とらわれて生きていたことを気づかせてくれた経験を大事にしたいと考えたから。

オ 世界の半分を知らずに生きてきた自分が世界の大きさに触れた初めての経験であったから。

問七 あなたが本文の筆者のように実際に外国に滞在たいざいすること、気づいたことを書きなさい。その際には具体的にどのような経験をしたか、気づく前の自分と気づいた後の自分を比較しながら書きなさい。